

氏名	ウス 臼	イ	タク	ロウ 朗	
学位の種類	博士（美術）				
学位記番号	博美第246号				
学位授与年月日	平成21年3月25日				
学位論文等題目	〈作品〉UPDATED 〈論文〉模様の交換—見慣れたものへの意識の変質				
論文等審査委員					
（主査）	東京芸術大学	教授	（美術学部）	坂口寛敏	
（論文第1副査）	〃	〃	（ 〃 ）	佐藤道信	
（作品第1副査）	〃	〃	（ 〃 ）	齋藤芽生	
（副査）	〃	〃	（ 〃 ）	櫃田伸也	
（ 〃 ）	〃	准教授	（ 〃 ）	光井涉	

（論文内容の要旨）

部屋の模様替えという行為は、一つの閉じられた空間を、既にその場にあるモノや素材の移動や置き換えによって描き換える、もしくは、外部から新たなモノや素材を持ち込み、既存の空間やモノにそれらを描き加える行為だと考える。つまり、モノの移動や置き換え、組み替え、交換、時には見立てなどを行なうことによって、普段無意識になっている細部にまで自らの意識を投影し、停止している空間に再び時間を与える意識的な行為である、と。

\*

本論考の主眼を端的に示すならば、「模様替え」の読み替えである。それは誰もが日常的に扱うモノや素材が、手や意識を介して置き換え、組み換えられること—無意識的なものを意識的なものに変換することにより起こりうる、一時的な空間把握の変質を読み解くことに起因する。モノや素材に対する記憶や経験が、身体の介在によって単一の指向性へと上書きされ、観る者へと反射し、知覚される。そのような、「模様替え」という能動的な行為を読み解くことで、見慣れたモノや空間に対する意識を変質させる行為を明らかにする。

第1章「部屋」では、模様替えについて論じるにあたり、模様替えを行なう場所とそれを行なう人、つまり部屋と身体との関係性を読み解くことで、本論における「部屋」の在り方を明示する。ここでは、部屋を含む住居の起源が身体を守るシェルター的な機能—つまり、母体と類似した機能であると定義することで、部屋に内属している身体が普段、部屋に対する無意識な状態であることを提示している。そして、この部屋に対する無意識な視線は、外的要因を介在させることで意識する場所へと移行することを可能にする。こういった部屋に対する意識の二面性を明らかにすることで、部屋と身体との関係を考察するきっかけを与えるものでもあった。

第2章「模様」では、「部屋」を一つの対象として捉える方法を提示した。部屋の模様替えを行うということは、結局のところ部屋をどのように捉えているのかということの起点とするが、本章では広域にならざるを得ないその知覚性を、「模様」という言葉に集約し、またその立脚点とすることで、議論的を明確にすることを可能にしている。ここでは、「模様」を切り取られた「図形」と連続した時間＝「状況」とに分けて提示し、部屋に対する知覚と比較検証しながら進めることで、「模様」という言葉のうちから出発した部屋の対象化は、単に日本語の意味での—つまり、先に述べたような図形や状況を指し示

す、視覚的に認識されうる「模様」とは、もはや別の、記憶や経験の総体として想起される、知覚図式としての「模様」であることが論考を通して明らかとされた。

第3章「交換」では、知覚図式としての「模様」が、模様替えという部屋に対しては同じ条件を提示していくように見える家具や雑貨の位置を変えるだけで、違う「模様」ということができるのかを論考した。ここでは、模様替えを行う時間を過去と現在と未来に分け、それぞれの時間に対応した知覚図式としての模様を比較することで、部屋に対する意識の変質を読み解くことを可能にしている。

本論の基底をなすのは、「ものを造る」という過程において、素材やそれに関わる空間をどのように認識し、また、選択していくのかを問うものでもあった。それは、自らの制作過程においても同様の問題意識があることに由来していたのだが、「部屋の模様替え」という（文化的相違はあるものの）一般的に認識されうるであろう、恣意的な行為を通して考察することで、多少なりとも「造る」ということへの自身の問題意識を提示できるのではないかと、一いわず「部屋の模様替え」という行為の過程には、ものを造るうえでの行為と同様の過程を踏むのではないかと考えている。

ここで提示しておきたいことは、本論における「模様替え」に対する論述が、必ずしも自身の作品と直結しているわけではないということである。つまり、私によって造り出された作品を、「模様替え」という視点によって直線的に読み解こうとしていたのではなく、「ものを造る」という初源的な行為や出来事的一端としても解釈されうる問題を提示し考察することで、結果として作品に対する視点の可逆性を内属させることを目的としていた。

すくなくとも、私が作品として提示しているものの多くに、素材や日用品としてそのまま還元される状態で使用していることや、全体として部屋のようにレイアウトしていることも、「ものを造る」という問題意識との関係が見いだすことはできるだろうし、「模様替え」という行為の内容との関係も見いだすことは可能であろう。

各章には私が造り出すものに対する直接的な明言はしていないが、本文に関係性が見いだせる作品とそれについての考えに関しては、本文とは切り離れた形で各ページに提示した。

#### (博士論文審査結果の要旨)

いつも見慣れて気にもとめない風景が、何かが少し違うだけで気になることがある。ふだん住んでいる自分の部屋などは最たるもので、人が来るとなると急に部屋の様子が気になったりする。「ものをつくる」こと、作品を提示することは、そうした変化のきっかけをつくることだと考える筆者が、その知覚と認識の仕組みを、部屋の「模様替え」に例えて論じたのが本論文である。

筆者によれば、見慣れた風景とは、記憶や経験の総体としての知覚図式（模様＝図形＋状況）としてある。それは、たとえば先述の部屋への来客や、筆者の作品でいえば観者という外部からの介入によって、初めて意識化される。それを意図的に行なうのが「模様替え」であり、そこで行われるのは、ある知覚図式からある知覚図式への選択的な交換だとする。筆者は、もの＝作品をつくるということは、まさにこの「模様替え」に他ならないのだと考える。ただ筆者の論理にとって、部屋の「模様替え」それ自体は、作品においても論文においても、比喩あるいは象徴的な例示にすぎない。そのため、実際に部屋のような展示形態の作品を、論文中で作品図版として使うことは、筆者にとって比喩が作品になってしまう、主客転倒のゆゆしき事態だったのだろう。中間審査のあいだ中、かなり難解な認識論の文章のみだとわかりにくいため、作品図版を入れるべきだとする査読者側と、文章と作品は直接イコールではないから入れないとする筆者の間で押し問答がくり返される、かなり稀な面白い状況が続いた。結果として文中の図版は点線の切り取り線がつくという、これもまた面白い“妥協点”が成立することになった。読みやすさは、査読者というより今後の読者のためであり、論文はあくまで筆者の意図と同様に読

者を想定したものであるべきだが、筆者のこだわりはむしろ自身の考えを正確に伝えたいという強い信念によるもので、むしろ好感を抱かせるものでもあった。深く思慮された内容から、学位にふさわしい論文として評価された。

#### (作品審査結果の要旨)

制作場所の作業机。無造作に積み上げた本。整頓された道具達。アトリエをそのまま展示空間に移し置いたかのように見える作品群。しかしそこに配置された個々のディテールは決して日用品ありのままの特徴を留めたものではない。時には白木の素材を使って何かに模された形態だったり、塗装をはぎ取られたかのような家具の作り直しであったり、はりつめた秩序で配列された日用品だったりする。それらは部屋の中の出来事のようにあえて配置されている。元々の素材に還元できる状態で提示された物達は、白井がほんの少し手を加えただけである。しかしその手の匙加減によりかえって彼の行為の痕跡がそこに透けて見える。彼は「経験を視覚化する」のだ。制作空間や展示部屋自体が経験してきた時間の堆積の上に彼や観者の身体的経験が「上書き」されるのだという。

『updated』とは博士展示提出作品のタイトルである。コンピューター用語であるinstallという言葉に対置させるように、updateという言葉で彼は作品の一つのあり方として提示する。

今では美術家の誰もが使用するインストールという言葉。ある場で発生したものの息吹を「作品」として別の場に注入／インストールするかのように、彼はインストールという言葉を感じ取る。いわばそれは展示空間というハコの特性にある時期依存するだけの行為であり、別の場所に於ける作者の経験や展示場所の過去の有様などは考慮されずに観者に提示される。それに対し「既存の情報が更新されるかのように、元々場所の持っている経験や作者・観者の経験が延々と上書きされる」感覚を、彼はupdatedという言葉で表現する。それがプライベートな「部屋」というものの本質をなぞらえるかのような彼独自の作品として表現されるのだ。

初個展は、アトリエ内部をカフェ空間の既存の特徴の上に移し再構築するような展示だった。今回の展示場所はその場に流れた時間や他者の経験の匂いなどの特性が見えにくい「美術館」という場。既存の場所的特徴に「上書き」をするという行為を拒絶するホワイトキューブにアプローチした今作品は、美術館見取図を再レイアウトした平面や、床と数メートルの高さの天井との間に取り付けられた長い突張棒など、果敢に場に対する試みを含んでいた。しかし、まだあのようなニュートラルな場に作品の在り方を柔軟に添わせ得たとは言いがたい面もあった。それは今後の課題になるだろう。

作品の追想や説明になることを周到に避けるかのような論文は、部屋の模様替えという行為と作品を作るという本質的な行為との、深層での共通点を指摘していた。論文を読み解きながらこの作品を理解することは作者の望むことではないらしく、作品と論文の整合性という観点から審査することは骨が折れた。しかし、「経験を視覚化する」という、概念というより一種の美学に裏打ちされた作品／論文双方の圧倒的な緊張感は、どちらも彼のすぐれた資質を表すものであることは間違いないと感じた。よって、博士の学位を認めることを全一致で了承した。

#### (総合審査結果の要旨)

こんなに長い年月と時間を費やしてアトリエ空間とやり取りした学生を私は知らない。何時覗いて見ても、油画のアトリエに持ち込まれ、手を加えられた多くのモノにより配置された部屋内に本人は居る。身体（自己）を介在させた部屋（器）と外界（風景）の関係を、時間軸を通して頭にして行く申請者の創作活動は、学部生の時期から一貫し、持続的に行われている。

研究作品「UPDATED」（更新された）は申請者の継続する創作活動の部屋を大学美術館のブースに移項、

更新していくインスタレーション作品であった。

美術館の屋根形の立体作品や床と天窓を関係付ける木柱等と様々な構成要素が場の特性を独自に視覚化しており、作品と場の関係を読み解く鋭い問題提起として高く評価した。

研究論文「模様の交換」は申請者の創作活動の基軸である、風景と部屋、視覚と体験の、またそれらの間に置かれている身体（自己）との関係性を、一般的に行われている部屋の模様替えと関係付けながら論考する手法はユニークであった。ややもすると独断に陥りやすい現代美術の創作活動を、日常の目線で論じた意義は大きい。

審査会では、これまでの一連の創作活動を踏まえて提出された申請者の論文と作品が、独自の批評性と熟考された表現を獲得したものであり、博士の学位を認めるに相応しい優れたものであるという評価で全員一致した。

作品＝完成物と言う概念を必要としない申請者の永続する創作活動が、新たな美術の地平を切り開いて行く事を期待する。